

かゑらじと かねて思へハ 梓弓

なき数に入る 名をぞとどむる

四條畷に散った若き武将、楠正行

楠正行通信 第124号

令和3年2月9日

発行＝四條畷楠正行の会

〒575-0021 四條畷市南野5丁目2番16号

四條畷市立教育文化センター内 072-878-0020

北朝1代、光源天皇の味わった地獄変

光源嫡流・崇光系と、庶流・後光源系の対立

— 今に続く皇統は、後花園天皇の末裔 —

● 後深草系を担いだ足利氏 ●

今回も北朝の天皇について取り上げる。南朝は衰退したのに、なぜ北朝は生き残ったのか—石原比伊呂著「北朝の天皇」(中公新書)を参考に検証する。

古代、壬申の乱(672)後、天智系と天武系の分裂が起こり、中世には、保元の乱(1156)後、後白河と崇徳上皇の対立を経て、承久の乱(1221)後、後嵯峨が混乱を収束し鎌倉幕府と良好関係を築き、公武協調の朝廷政治によって、キーマン天皇の登場となる。

後嵯峨の継承者、兄、後深草と、弟、亀山の対立を経て、持明院統の伏見即位によって、後深草は治天の君になるが、この後、亀山を祖とする大覚寺統と、後深草を祖とする持明院統の対立が構造化される。

幕府は、後深草流～持明院統が存続するよう措置し、固定化に働いた武家の意向の影響が大きかった。

後二条が即位したときは、5人の上皇と法皇という、空前絶後の様相を呈していた。すなわち、大覚寺統は亀山法皇、後宇多法皇で、持明院統は後深草法皇、伏見上皇、後伏見上皇と3人の上皇を擁した。

後醍醐は所詮、中継ぎ「一代の主」という立場であったが、後宇多(実父)の死によって皇位を自らの子孫に伝える障壁・重しが取れ、東宮、邦良の死という2枚目の障壁も取り除かれたが、幕府が持明院統の量仁(のちの光源天皇)を立太子させたことから、後醍醐に焦り・焦燥感が噴出し、《鎌倉幕府こそが最も高く厚い障壁であることが明確に》となると、倒幕への道を突き進む。

後醍醐は、新興勢力の登用に走り、成功したかに見えたが、そもそも風を読まず、大内裏の造営などの強硬策は完全に裏目に出るとともに、政権内部に抱えていた護良親王と足利尊氏の対立・抗争が表面化し、短期間で行

き詰まりを見せる。

一方、足利氏は、頼朝は源義家の嫡子で義親の子孫であったが、足利家は、義家の庶子、義国の子孫という血統上の弱点を抱えていた。この弱点を補うため、足利氏は、持明院統を担ぎ出し、足利軍は、『北朝の軍隊』である」という認識の社会的定着を図っていくのである。

足利政権内部の対立・抗争である観応の擾乱の影響を受け、正平の一統になるものの、観応の擾乱が収まると、たちまち一統は破綻し、光源、光明、崇光と直仁親王が吉野朝に拉致・幽閉され、推戴すべき北朝の人物がいない中で、強引な解決策として拉致を逃れた崇光の弟、後光源が擁立される。

しかし、この後光源擁立は、兄・崇光の系統と、弟・後光源の系統の、新たな対立・抗争を生む。そして、3上皇の復帰後、嫡流としての崇光に天皇家財産の処分権が残ったことから、潤沢な経済基盤＝長講堂領を背景に、崇光上皇は北朝本来の正統としての存在感を示し続けるのである。

しかし、足利義満は、後小松時代に崇光の所領を取り上げたため、この後、崇光院流は京都南郊の伏見で隠棲同然の日々を過ごし「伏見宮家」と称されるようになる。102代、後花園天皇の即位によって、崇光院流が復活を遂げるまで、まだ少し時間がかかる。

● 廃位・幽閉を強いられた光源天皇 ●

北朝1代光源の地獄変といえ、一に、鎌倉幕府の滅亡、即ち後醍醐によって、皇位にあったという事実そのものを抹消されたことであり、二に、吉野という見知らぬ土地・山奥での軟禁生活を強いられたことである。

しかし、光源は足利直義との「君臣合体」の関係を築き、天皇と将軍の関係の萌芽として、園大暦によれば、

